読者による寄稿コーナー

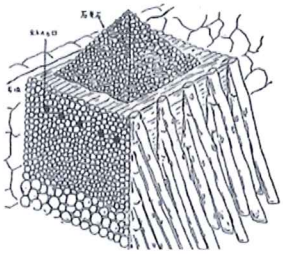
山灰と牡蠣灰

株式会社　バルクワールド　川　添　　洋

葛生（栃木県佐野市）の街に面した丘陵の一角に嘉多山公園があり，ここに「七輪窯跡」がありますが，この七輪窯は吉澤石灰工業さんの初代兵左氏が1873年（明治6年）に石灰工場を開設した際に設け，大正まで使われた窯跡です。現在は寄贈されて人々の憩いの場となったその公園を歩くと，窯跡に案内板があり，『佐野市の石灰業が始められたのは江戸時代で，製造された石灰は江戸城の修復や，日光東照宮の造営に用いられました。最初は「つぼ窯」工法でしたが需要に応じきれず，改良大型化したのが「谷焼窯」工法です。そして天保初年より約70年間，野州石灰の名を残しました。』とあります。尚，『日本産業史大系 関東地方篇』には，石灰焼立は天正年間（1573－1591）に始まり，その生産は江戸初期から江戸城造営等の漆喰需要から，野州石灰（いしばい），及び，八王子石灰が江戸幕府の御用石灰として保護統制を受けて発展したとあり，又，興味深い事に，これら野州石灰と八王子石灰の“山灰（やまばい）”に対して，江戸内湾では貝殻を焼き立てた“牡蠣灰”があって，その各シェアは，野州石灰が10，八王子石灰が1，そして江戸牡蠣灰が5の割合との明治初期の物産統計を紹介しています。

東西斜面に作られた
七輪窯跡

処で，同本には八王子石灰の「せんだん焼」の復元図が載っています。それによると，石垣を背に横巾6mに亘って木材を積み重ね，その上に柴垣を300～500束を置いて石垣と同じ高さにし，そこにピラミッド形の石灰石を積み上げるもので，これを構築するのに3ヶ月を要すると云う大掛りな工法です。火入れは横面の火入れ口（図；黒丸）から点火して2日間にわたって焼き上げ，800～900℃程に加熱して炭酸ガスを放出させて生石灰を得る焼成工法でした。この工法と葛生地方で独自に発達した谷焼工法とがどう異なるのかは定かではありませんが，この“800～900℃の温度”との温度域を聞いてすぐに思い浮かべるのは縄文人が縄文土器を焼いた温度です。人が鞴（ふいご）を知る以前，冬の北風を利用したりしての野立てで土器を焼いた温度は，まさにその温度でした。



復元図：『日本産業史体系』
より転載

千葉市にある加曾利貝塚は日本最大級の貝塚遺跡として有名で，又，縄文中期（約4千5百－3千5百年前）の加曾利E式，縄文後期（約4千5百－3千3百年前）の加曾利B式と呼ばれる標識縄文土器が出土した遺跡としても知られています。貝塚は云うまでも無く貝殻の捨て場で，内陸に塩をもたらす干貝としてある季節に専業者によって作られたと推定されていますが，大量の貝には肉片が残って不衛生なのでそのまま放置しなかったはずですが，どうしていたのでしょうか。貝を食べて後うっかり貝殻を放置しようものならひどい臭いが漂って閉口した経験は誰もがあるはずです。

それについて示唆を与えるのが近年発見された千葉市の大膳野南（だいぜんのみなみ）貝塚で，約4千年前の遺跡です。その竪穴式住居の炉穴やその周辺には白土が塗り込められており，その白土は貝殻を粉末にして焼いた貝灰に水や土等を混ぜたもので，日本最古の漆喰として話題になりました。処で，大膳野南貝塚で牡蠣灰が作られていたのならすぐ隣の加曾利貝塚でも作られていたと推定してもおかしくなく，とすれば，牡蠣灰は，唯単に漆喰として使われただけでなく，貝捨て場の消毒剤として使用されたとしてもおかしくない事を意味していますが，実際はどうだったのでしょうか。

さて，山灰の地；野州では，栃の実のアク抜き等に使われた“灰”が縄文時代に特産だった事が判っており，又，加曾利貝塚には栃木産のチャート等が出土していて相互交流があった事も解っています。とすれば，野州に於いても，樹木を焼いて作った“木灰”だけでなく，“石灰”を往古から作っていたとしてもおかしくない事になり，縄文遺跡が葛生にあるのは，石灰石を求めて葛生に居を求めた故とも云える事になりますが，実際はどうなのでしょうか…今後の発見が楽しみです。